

当センター会長訃報のお知らせ



堂之脇光朗会長が、2015年9月7日に永眠いたしました。享年83歳でした。ここに生前のご厚誼に深く感謝するとともに、謹んでお知らせいたします。

会長は外交官として長年国際的な軍縮問題に尽

力され、退官後にJCCPにて平和構築・紛争予防活動の普及に貢献されました。2007年に私に当センターの事務局長への就任をお声かけ頂いて以来ご一緒させて頂き、その姿勢と功績を心から尊敬しています。

理事長として、JCCPに残して頂いた思いと責任をこれからしっかり受け継いでいきたいと思えます。支援者および関係者の皆様におかれましては、世界の紛争に対して日本の組織が担いようの平和貢献のさらなる実践のため、これからも引き続きご支援・ご指導頂ければ幸いです。

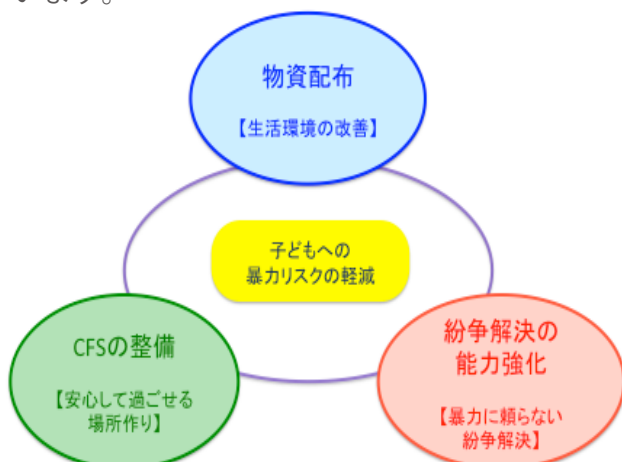
理事長 瀬谷ルミ子

特集

南スーダンより現地レポート

事業の3つの柱

本事業では、物資配布を通じて子どもたちの生活環境改善を、チャイルド・フレンドリー・スペース（CFS）を整備して子どもたちが安心して過ごせる環境づくりをしています。この事業で実施する研修を通じて周囲の大人たちが暴力に頼らない紛争解決能力の習得の機会を作り、子どもたちを暴力から守ることを目指しています。



紛争解決研修を修了した指導者たち

南スーダンでは、紛争により150万人以上の国内避難民が発生しており、強制的な徴兵や性的虐待など、子どもに対する暴力が深刻です。子どもたちを暴力から守るため、JCCPは2015年4月より、ジュバにて新規事業を開始いたしました。



現地オペレーションマネージャーの Fredah Mputhia より、チャイルド・フレンドリー・スペース（CFS）と指導者対象の紛争解決能力研修について現地レポートが届いています！

チャイルド・フレンドリー・スペース（CFS）

グンボの国内避難民キャンプにあるチャイルド・フレンドリー・スペース（CFS）は、学校のすぐ横に JCCP が建設しました。学校の昼休みや放課後には、終業のベルが鳴るのを待ち構えていた子どもたちが CFS へ走っていき、民族の壁を超えて共に遊びます。CFS は子どもたちの交流の場としてだけでなく、交流を通して子どもたちがトラウマを乗り越え乗り越えるきっかけ作りにも役立っています。子どもたちは皆快活で、休み時間いっぱい（時には休み時間が終わっても）遊び、先生は度々子どもたちに教室に戻るよう呼びかけなくてはなりません。学校が終わると、子どもたちは家に帰るまでの間、再び遊びに没頭します。CFS での時間は子どもたちにとって大切な生活の一部であり、彼らはここでの時間を通して、国内避難民として暮らす非日常から、子どもとしての日常生活に戻れるのです。



CFS で遊ぶ、学校帰りの子どもたち

※この事業は、JCCP 会員や寄付者の皆様からのご支援と、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム（JPF）の助成によって行われました

指導者対象の紛争解決研修



国内避難民キャンプで研修を受ける指導者たち

JCCP は、南スーダンの NGO である Organization for Nonviolence and Development (ONAD) と共同で、3 日間の紛争解決研修を実施し、23 名のキャンプリーダーが参加しました。研修の主な目的は、グンボ地区の国内避難民の指導者を対象に紛争分析、問題解決、交渉、仲介などのスキルを身につけてもらうことです。グンボの避難民地区の指導者の多くは女性です。彼女たちの夫や父親は内戦で行方不明のままだからです。今回の研修中、彼女たちは限られた時間の中で可能な限り学ぼうと積極的で、その思いは彼らの鋭い質問にも表れていました。

研修を終えた参加者は自らの地域が抱える問題に直結した紛争解決能力を習得できたと喜び、ある参加者は「こうした研修で私たちは成長し、南スーダンでの平和実現も早い段階で可能となるだろう」と話してくれました。今回の研修で共同作業の重要性について参加者の理解が深まったのも意義深く、「第三者について理解することの重要性を学んだ」との声も聞かれました。

※この事業は、JCCP 会員や寄付者の皆様からのご支援と、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム（JPF）の助成によって行われました

現地スタッフの声



私の名前は、ルバイ・ティングワ、34 歳の南スーダン人です。2012 年 2 月にソーシャルワーカーとして JCCP で働きはじめ、現在はプロジェクト・オフィサーとして JCCP の事業に携わっています。

南スーダンで活動する非営利団体の JCCP は、支援と援助を裨益者に直接届けています。この仕事を通して日本のように異なる文化背景を持つ人々と働くことで視野が広がりました。また、支援を必要としている人々の必要性に即した援助の手を差し伸べる機会を得られることをとても光栄に思っています。